

針葉樹會報

通卷第八十號



變らない近藤

K U R O H

九州から出て来た近藤は、大船朝八時の下りに村尾と乗つて来る筈になつてゐる。雨のフォームに立つて思ふのは、何年か前大阪から上京した僕を、この二人が河口湖へ連れて行つてくれた秋の日だ。何でも眞夜中に着いたので、宿屋は文字通り上げてくれただけでお茶も出さず床もさらず、翌日といふかその朝さいふか、ひどい雨で河口湖も見えず、かまつてくれない宿屋を近藤は吾家の様にして一日中遊んで歸つた。今にして思へば連れて行かれた處が、果して河口湖だったのか、泊つた處がほんさに宿屋だったのか、いくら雨でもまるつきり見えない河口湖や、變にこゝろ渡廊下の様なもので繼ぎ合はせた、何階だか分らない大きな宿屋の建物も、何だか近藤が化けた様に大きいばかりで何處か理窟に合はなくて、のべつに近藤の術中に陥つた事があつた。その近藤が今日は總てを村尾と僕に委せてやつて来る。どうしたら近藤が喜ぶかそればかり考へてやつてゐるのにきつと觀念してやつて来る。列車は一つカーブして驛の構内に入つて来た。

一番前の箱から上半身を乗出した近藤、そのこわい顔はフォームの人達が目を見張つた程だったが、僕を見るなりペン公がゐないといふ。「やられた」と思つたらしい。用意の朝飯を喰べさせてゐる間に國府津に着いた。天氣ならば御殿場線で松田まで行つて、足柄峠から金時山を越えて仙石原へ降る豫定だったので、幾つか汽車を待つたけれども村尾は遂に現はれないので小田原へ出た。バスは谷間の雨に打たれて湯本、塔ノ澤と登つて行く。砲車を引張つて小型の戦車が前に行くのでのろかつたが、宮ノ下でがら空きになつたバスは戦車隊を抜いてからは、雨に烟る早雲山も宮城野の蕎麥屋も忽ち後にして午少し前には仙石原に入つた。大きな湯槽にながくと涵ると金時も乙女峠もぼんやりながら確かに見えるし、

宿屋もらやんとしてゐたので近藤も漸く安心するかに見えた。村尾と別に夕方から来る筈の手塚を待つて夜が来た。浴後の酒はよくまわつて山の話、仲間の話、昔の話、今の話夜の更けたのに驚いて横になると、近藤は眠るが如くに物をいはずなつてしまつた。

よく晴れた。仙石原を湖尻へ向ふ。新雪を載いた富士がかつきり長尾峠の上に現はれる。朝の光に包まれて芦ノ湖がほのくくと薄の波の彼方に浮んで来る。船は水鳥を飛び立たせて箱根町に着いて、心持汗ばむ頃二人は鞍掛山の頂上に立つ事が出来た。途端に村尾の分さしてきのふから持ち廻つてゐるコーヒー牛乳を飲まうさいひ出した。どの位前から考へてゐたのか、上の細くなつてゐる形を無視して瓶の高さを二等分した下半分を、うれしさうに飲んでゐる近藤に湖尻峠の向ふから初雪の富士が笑つてゐる。黄色の駒ヶ岳と青い芦ノ湖で水繪を一枚描いてから萱と薄の尾根をどんぐり降る。徑が谷へ入るさ一層急になつて、枝を折り水をはねかして進む近藤の後姿は、帽子と服の間に一杯毛の生えた頸がか脊中だか分らない太いものが見えるだけだが、前から見たらどんなだらうと考へたら滑つて轉んだ。恐ろしい通力だ、後さ見せて實は顔だつたか。

途中の澤でズボンを洗つて廣河原の温泉場へ入つた。何處かで休み度いと思つたが河馬が眼鏡をかけて後脚で立ち上つた様なのさ、ズボンを膝の上までまくり上げて汚ない袋を先に引掛けた洋傘を肩に擔いだ二人は、曾て泊つた事のあるさいふ家でも斷られた。こんな服裝をしてゐるのがほんさばうんさ金を持つてゐるの

も知らないでなんて、他人の事の様な事をいつたくせに何合も自動車に追ひ越されながら湯ヶ原の街に降りて來た。

(十三、十、十七)

神 經 痛 記 (其一) 浩 一 郎

それは俄然やつてきた。尤も十月一日あたりから其前驅的症狀はあるにはあつたが、神ならぬ身のそれがかくも大事を惹起すとは思はなかつた。二日の日曜は神妙に静養して三日出勤して例の如く終日會社中を馳けまわつて、さて歸りの電車の中で俄然痛烈な疼痛が左足の附根を襲つてきた。丁度大腿骨が骨盤に接するあたりが錐で揉むやうに痛む。轉輾反側と形容する所だが、ラツシユ・アローの人垣の座席では右にも左にもかはし様がない。悶々のうちに新宿も過ぎて漸く中野迄來た。辛ふじて人波を分けてホームに出たが哀れや、完全に跛で、階段の手摺を傳つて這ふが如く、よろめくが如く改札口迄辿りついた。家まで五分の道程に十五六分を費したこそ勿論である。伸してみても、座つてみても、胡座をかいてみても實に八面玲瓏と痛むのである。左足の膝をくの字なりに曲げたなり柱に凭れかゝてゐるのが一番樂な姿勢であることを發見するまで、相當の膏汗が流れた。まあ食事の時はそれでもいいとして、さて寝る段になつて困つてしまつた。ビヴァークじやなし其儘布團をかける譯にもいかない。辛ふじて右下の姿勢で床に入つた。早速醫者といふ所だが、えたいの知れない此痛さはただ事じやあるまいと鑑定して明朝レントゲン診察の結果を待つて善處するつもりなのである。マンザリさしめぬ一夜は

明けた。曉方は殊に痛んで遂にビヴァーク型で一時を凌いだ。

四日の朝は天無情、土砂降である。遂に自動車の御厄介になつて待望のレントゲン寫眞をとつた。所が、先生の曰く「關節炎でも骨膜炎でもカリエス性のものでありません、單純な坐骨神經痛でしよう。急性ですから二、三本注射をすれば全快しますよ」

さ早速靜脈注射左腕に一筒、カンフル丁幾の夫の如くジーンと左腕の附根が熱くなる。暫くして稍々疼痛は薄らいだ様子

「精々安靜にして温めて下さい。會社は四五日休んだ方がいゝでしやう、近いから毎日注射に御出なさい」

さいふ譯で四、五日注射に通ひ日に三度藥風呂に浸つたが、痛は或程度迄薄らいだまゝ、どうにもならぬ。病院への往復十丁ばかりがどうもプチ壊しになるらしい。曉方が痛むのは例の如く、起きやうとする瞬間、目も眩む程痛い。便所へ通ふのがやう／＼である。

「オ父チャマ、オ手手ヒイテアゲマシヨウ」

五才の次男が傍へ来る始末である。最早西洋の藥丈ではいかぬ第一當分歩いてはいかぬと注射に見切をつけ、十八番のニャトココンニャク巻法戰術に轉向したのは約一週間後のことであつた。晝夜兼行、温めに温めた。其間藥湯に二度、三度入浴である。藥はノボヒンと稱する松葉のエキスである。以上の様な作戰であるから寢ては居るが、實に多忙である。夜もオチ／＼眠られない。そこで夜中は懷爐に歩哨を頼むことゝなつた。

最初のうちは明日は、明日はと出勤のことばかり考へて居たが敵は思ひの外の頑敵で、最早完全な陣地戦に移つたと見たので、

遂に長期抗戰のメッセーヂを發表するに至つた。するさ「珍らし

いこともあるものだ」さいふ譯で各方面から「病氣見物」が殺到してきた。日によつては訪客踵を接する盛況である。其合間、合間のコンニャク取換は容易の業ではない。かくして、一時は眞鍋先生の物療の再診察を乞はうかき迄煩悶した頑敵も、二週間目の神嘗祭あたりを境として漸次退却の兆が見えてきた。所が敗殘兵の一部はゲリラ戦に出たものゝ如く、曉方になるさ左の向脛の筋肉が痛み出した。丁度大急ぎで歩いた後に向脛がひきつるやうな氣持である。一日に一丁も歩かぬのに此痛は何としたことか。

(註・この筋肉が歩行上實に微妙な役割を持つてゐる事が後に至つて判つた)

幸なことに、左足を除く四體は頗る健全なので、食物の心配は全く無い上に、好きな本が悠り讀めるのが何より有難い。見舞の手紙の返詞も重要な仕事の一つである。靖國神社の臨時大祭は降り續いた雨の霽れ上つた秋晴であつたが、足の丁合も大分いゝらしく向脛の痛も薄らいだので、五六丁ある驛前の床屋迄出かけた。恐る／＼歩いて見るさ二週間前の遭難當時とは比較にならぬ程快適である。之に勢を得て、すかさず追撃戦に移つた。コンニャクを取り換える手もイソ／＼として朗である。こゝで私ははからずもコンニャクの妙なる功德に感謝をさゝげたのである。そして此製造がお上の統制圏外におかれた天祐に心から感謝した。(註・コンニャクは飛行機の翼の耐水塗料の原料であるから其悞は充分にある)あの煮ても、焼いても、クニャ／＼として取り止めのないやうな代物なればこそヒツタリと肌なりに喰付いてホカ／＼と温め

てくれるのである。寒天では千切れてしまふだらうし、豆腐では崩れてしまふだらう。ゴムならば一番感じは近からうが、ゴム禁制の時世にコンニャク程の大ゴムは手にも入るまいし、何十回も熱湯に浸したらどんなもんだらう。こう考へて来るさ、イツッおでんにして毎日喰べて居たら内外から温まつて一層癒りが早かつたかも知れぬ。コンニャク問答さか、酢だの、コンニャクだのさ兎角コンニャクは物事の中途半端な引合に出されて冷遇されてゐるが、私の場合は之の御蔭で一足を取り止めたのであるから、コンニャク塚でも樹てればなるまい。

さて、驛前遠征で大いに自信をつけたので明日はさ意氣込んで居るさ翌日から四日間の雨續き、萬一冷えて逆戻りしてはさ、又神妙に床にもぐり込んでコンニャク戦術に其機を窺つて居た。遂に三週間目の二十四日、空は晴れ上つた。用心深く懷爐を背中にし、杖を携え今度は次男の手を引いて近所を四十分ばかり散歩した。若干の坂路を交えて。家に歸つても足は何とも無い。實に嬉しかつた。無くなつた足が生えたやうな悦だ。翌日は階段と電車を交えて井ノ頭行。これも無事バス。こゝまでは着物と下駄である。さて仕上には北伊豆の畑毛温泉へ行かうといふプランであるから靴のテストをせねばならぬ。無論下駄よりは容易であらうと想像して居た。目的地、大宮公園(堀之内の傍)。さて、テスト第三日目、颯爽と靴で支關を出た。二、三步、五、六歩、十歩、どうもおかしい。軽い跛である。ハテ、一月も靴をはかぬさこうもおかしいかと、よくよく見てあれば素足乃至下駄の場合と靴の場合とでは踵の接地仕方に著しい相違のあることを發見した。素足又は

下駄の場合には踵は殆んど一様に——平に——大地を踏む。つまり踵全體で體重を支える。所が靴の場合は先づ踵が接地して體重を支えてから爪先の方へと接地してゆく。つまり靴の底が本當の踵よりも楔型に踵の方丈高くなつてゐるからである。所で踵で體重を支える——換言すれば爪先を釣上げておく直接の役目をしてゐるのが向脛の筋肉で、その筋肉を指圖してゐる神経が坐骨神経なのである。其坐骨神経を痛めた人が、八分通り恢復した處で俄然健康な時同様、踵に體重をのせかけやうとしたのだから、もたないのも無理がない。何さかして踵で起たうさ焦るがどうしてもいかぬ。電信柱につかまつて起たうさしても、左の踵が地につくや否やバタツと靴底全體が接地する。右は踵から爪先へやんわりと接地するの、左は着くや否やバタツである。いくら踏張つても、向脛が變にむづ痒いやうでテンデ力がこもらない。歩行に差支はないがどうも左右のヒツチが合はない。ジワリ、バタツ。ジワリ、バタツ。どうも軽い跛である。父親の苦衷を知らぬ次男君「オ父チャマ、ハヤクパスニノリマシヨウ」

と先にかけてゆく始末である。(諸君、大腿で急歩した時、何故向脛が變に釣るかよく判つたでせう)なるべく左の足は引摺るやうに歩いて兎に角靴による大宮公園をバスした。其夜も、翌朝も、別段足は痛まぬし、向脛君はまだ腰がた、ぬらしいが、そこは伊豆の靈泉に委せるこさとして、十月二十七日午前十一時半、氣笛一聲(空氣の氣ですぞ)東京驛を出發した。遭難以來實に二十四日目である。さてさて神経といふものは實に厄介なものである。(以下次號)

保養日記（其の二）

日 江 井 正 己

八月十日（晴）晴が大分続く。弟が来てくれさせがむので法師へ行く道の方へ蝶を探りに出掛ける、營林署の前の林に入る。この林道をつたつて法師からやつて来たのはたしか四年前だつたらう、その時と全然變つた所はない。矢張りこの澤もあつたしあの橋もあつた。

製材所の所から稻堤へ抜ける道をたどる。こゝは法師へ行く方の伐採が終了して、こつちの方へ移つた許りのせいかレールも立派だし仲々岩疊に出来てゐる。この下を流れる澤が四萬川の本流である。暑いぢり／＼照り付ける太陽もこゝまで来るさ兩岸が狭まつた爲に効力はない。至る所美しい淵や瀬になつてゐる。兩岸の岩壁には實に見事な岩場が澤山ある。又奇妙な形の岩やすばらしいトンネル等あつたりして名前があつさり付けられさうだ。こゝまで遠路遙々入つて来る仁も居ないさ見え名無しと聞く。弟も蝶を大分採つたらしい、ぶら／＼歩いて行くさもう歸らうといふ。歸途トンネルの中で涼を貪りつゝ歸る。午後夕立がある、猛烈な一降りが終ると雷は何處へか退散、夕焼雲が金色に輝く、蝸の聲が一きは鋭く鳴り渡り、腹の虫が鳴りだす。夜外に出て仰ぐ空に満天の星が光る、北斗七星が美しい。

八月十三日（快晴）この地から杉木立の向ふに見える尖峰は魅惑的な姿態を青空に聳え立たせてゐる、上高地で云つたら三本槍位の

の所であらうか。名を聞いたらしき、字はどうかかは知らぬさいふ、登山路もないし僅かに獵師が通ふ小徑があるのみさの事だ。でもかうやつて毎日ながめてゐるとなんだか知らぬがむす／＼して来る、矢張り本能だ、あの尖峰は岩だらうか土くれか、あの尖峰の下までは瀧が相當あるだらう、頂上から見た景色は如何だらう、素晴らしいだらう、上越の山々が一見えだらう、遙か北や八ツが見えやしないか、等徒らに空想して果ては頂に到着した様な氣になつて、ふと我にかへるさ宿の前にぼつんと立つて「何をぼんやり見てるんだい」等と人に冷かされる。「そんな山へ行きなかつたらさつと行つたら良いぢやないか」といはれる、しかし考へて御覽こんな體で山へ行かれるか、それに第一精神的に見ても未だ平常ぢやない、病的だ、と答へてやりたい。しかしさういふ奥底には何時か登つて見せるさういふ野望が閃いてゐるのだ。

朝は一番早く光線を浴びて空に浮び上るその時の美しさ、山肌が明瞭に讀みされて随分近いと思はせる、霧がその腹を閉すさ妙に遠く見える、又太陽の沈んだあざ黒々と聳える、こゝしきは又魅惑的だ。高い山許りに憧憬れて低山を知らなかつた自身は、始めて低山の美しさを味つた感がする、しばらく山を見ないでゐたせい

かも知れぬ。

八月十六日（晴）弟達も昨日歸つてしまひ僕一人となる。こゝん所數日妙に一人になりたくなつた。人さ一所に居るのがつらい。この一人を味はふ爲風呂へのんびりさ入る。手足を完全に延び切つてひたる氣持は又さない。じつと瀧の音を聞いてゐるさ一種のリズムとなつて心に快樂を與へる。

朝日が照りだした。山の肌を一つ一つ訪問しながら、光は天地に満ち溢れる。忽ち起る蟬のオーケストラ、そして小鳥の囀り、それにもまして恒に一樣な瀧の音、こんな時にこそ生甲斐を感じる。燭りごろり横になつて口ずさむ旅愁の歌、成程こんな時に出来た歌なのかさ不思議に思ひつゝ、うたふ。かうやつて思ひ起すあの日あの山の事、夢の様な遠い思出、けれどこれから新しい生活を始めなければならぬ、かうやつてゐるのもそこに意義があるのだ。徒らに過しては居れぬ、山に對する態度、それは何時も變らぬ。時あつては心境は變るけれど根底のものは決して變じたものではない。むしろ困難、曲折を経て反つて鞏固なものとなるのだ。しかしなんさなく今の心境は淋しい。

何時寢たのかふと目を覺ますと晝近い。相不變瀧の音、蟬の音目覺ましに湯に入る、誰も居ないタイル張りの透明な湯を日光が美しく射通してあめ色に輝く、湯槽に頭をもたせて仰むけば日光が天井に反射してきら／＼と光る、脳髓に沁み通る快よさよ。日が蔭つたので外を見ると相當雲が多くなつてまた又一雨來るかも知れぬ。

八月十九日(晴)昨日は雨だつたが今日はどうやら晴れた。部屋にじつと構へてゐるさ病院の事が頭に浮ぶ、こゝへ來て病院の事など考へるのは全く珍しい事だ。あれから八ヶ月、退院後三ヶ月に垂んとしてゐる。退院して見るさ世間は餘りにも變つて居た、永い間寢て暮したものには寢てゐる時よりは反つて起きてからの方が淋しさを味はふ方ではなからうか。學校へ行つても面白い事はない、いやに皆すましてやがると思つた、これは結局病的な精

神なのだ。これではいけない心の休養が必要だと思ひついて此處へやつて來た。だが氣心を知る岳友等の出發を送るまでは心は案外平靜であり樂しかつた、それが一たび新宿から追出てしまふと跡は途端に淋しくなつてしまつたからだ。

病氣になるさ過去を考へる。中學三年の時二ヶ月許り寢た時矢張り色々な過去の事を考へた。旅行の好きだつた僕はちやいな温泉旅にも興奮してその思出を辿つたものだ。今度も寢てゐて思出すのは山旅の事それが不思議な事にはつらかつた登攀や困難な事はまるでおくびにも出てこない、皆天候にめぐまれた楽しい山行許りであつた。豫科二年の時試験で疲勞してもてあました體を秩父で暮さうとした事、雨に散々ふられて一宿泊めてもらつた炭焼小舎の氣持良かつた事、去年の夏劔澤から上高地まで縦走を行つた事——五色ヶ原の高原、上ノ岳附近から見た黒部上流の風光そして雲之平の印象的なスロープ、そしてその背後に聳える黒嶽の怪偉な姿、くた／＼につかれてたどりついた双六池の様子、傍に見えた天幕の光のなんさ嬉しく見えた事よ。又去年の夏秩父へ行つた事——瑞牆山の展望、待望の五丈岩へ登れた嬉しさ、唱ひながらのんびり歩いたその日、雲取小舎の仙人から色々面白い話をきいて夜の更けるのを忘れた事——。皆樂しい事だつたけれどもう過去の事だ。未來に樂しい夢を持たねばならぬ、すべてはつらい事かも知れぬが。

さつきからばら／＼と降る雨さ思ふとさうでない、よく見ると砂だ、さうだ淺間の爆發だ、あたり一面眞白になつてしまふ、木の葉は都會の街路樹のはこりを蒙つた様な具合になつてしまふ、部

屋を閉切るやら廊下へ砂を掃き出すやら大騒ぎ。午後になつても未だやまぬ、木の葉の上のが飛び立つてくるのかも知れぬ。宿の子はこの砂を壘に一杯ためて喜んでゐた。夜八時頃羽蟻の襲撃にあふ、今日は日が悪い。

八月二十二日(晴)こゝへ來てもう一ヶ月になる、早いものだ、ぼんやり過してゐる中に月日はぐんぐん過ぎてゆく、しかし月日は過ぎてても少しも後悔する必要はない、何か目的があつて來たわけでなし、強ひて目的を名指せば「心の休養」なのだから。

都會に居たら今の今迄慌しい心を抱いて獨り迷つて居たかも知れぬ、けれどもこんな心は最早微塵もない、毎日すがすがしい空気を呼吸し、日光に觸れてゐる中にそんな心は何處へか消え失せてしまひ潑刺とした心持になつた。一ヶ月の人の出入——今年は特にその傾向がひどいさ宿のものはいふが時節柄であらう——を見てもあるさ世の中には變つた人もあるさつくつく思ふ事がある。

今年は格別客の出入が多いといふ、もうぼつ／＼湯治客が見えて來たからこの夏も終りですさ主人はいふ。成程こゝ數日田舎の人らしいのがぼつ／＼見える。

八月二十五日(雨)時雨模様様の天候、もう秋だ、尾花の穂はすっかり出揃つて、虫のすだく音が淋しい、こゝへ來た時買つて來て今迄ほつて居いた「グンデファールト」の譯本を讀む、いつも乍ら獨乙人の不屈不撓の精神には敬服される、しかし相當良くない天候であつたのにあれだけの事をやつたのは全く素晴らしい、矢張り人の和さいふものは強調されていふ。知らず／＼の中に讀み終つて夢の様な氣がする。「ナンガ・バルパット一九三七年」の記事の

生々しく書かれてある事、まるで眞實の事とは思はれぬ位だ、あゝ、グーンも死んでしまつたのだ、しかしあの精神の持主達がこれで引下るさと思へない、最後にかいてある通り、又ナンガに向ふべき運命を持つてゐるのだし、又さうあらねばならない。我々は今後の獨探險隊に幸あれと祈るものだ。

この點如何にも淋しい日本、ヒマラヤへ探險隊位繰出されても良ささうなものだと思ふ。それには相應の準備がある、目的のみ考へて手段を考へぬさ破綻が來る。立教のあさに續くものは何處だらう。

八月三十日(曇)八月も終る、毎日かうやつて暮して來た日が無意味ではなかつた。朝起きて風呂に入り、温泉をのむ、營林署の方までぶら／＼散歩する、かへつて新聞を讀み、飯を食ふ、讀書に過したりして午前は終り、午後は又散歩や物事に過す、そして一日は終つてしまふ。「なんだか意味ないやり方だね」といはれても何とも思はない、これでも生きてゐるのだから。

九月四日(雨)歸る日、雨だ。これは涙雨だ、歸るなといふ證據だなんて女中にいはれる。自動車に乗込むさ早いものだ、お客の少いせいか自動車の中が妙にせい／＼する。温泉もじつくり噛めば味が出てくるものだ、鵜のみはいけない。平凡なつまらぬ所、そこに何か變つたものがあるさ、驚異の眼をみはつてそれを追求するものだ、それがあつた所ではないのに。こゝもそんな所かも知れない。

(完)

通信

○柿原謙一君より（十二月十一日附 林君宛）

北海道より歸られた東京の感じは如何ですか。學校を卒業する
と娑婆の風が身にしみる。小生の亡父は大學時代を *Happiest*
days of life ippo ぐせの様に申してゐましたが、お互様に貴兄も
小生も人生の荒波にもまれますね。祈御健康。

記 録

○乾徳山（十月十七日）小柳二郎

○蓬峠・七ツ小屋山（十一月二十日）増山清太郎

雪は東鐵武能小屋から蓬澤へ下り着いた所まで、多い所で三尺。
峠の邊りはスキーヤーが數十人ゐたが、あそこ迄擔ぎ上げて笹ス
キーをやる奴の氣が知れぬ。

消 息

鈴木英雄君 御結婚さる。新婦は小岩井農場長、戸田務氏次女

克子嬢。十二月五日東京會館にて披露。

打橋壽郎君 神奈川縣鎌倉郡腰越津三（小池農園内）へ轉居。

鷹野雄一君 戦地の宛名は中支派遣土橋部隊氣付松田部隊森隊

柿原謙一君 國方部隊時乘隊第一班へ變更。

森脇芳之君 十二月一日近衛歩兵第聯一隊へ入營。

小林重吉君 十二月十日野砲第一聯隊入營、即日歸郷。

尙同君は東京に轉勤となつて住所は左の通り。

豊島區長崎南町二ノ一、九七〇

望月達夫君 十二月十日歩兵第一聯隊入營、即日歸郷。

小谷部全助君 一月十日野戰重砲兵聯隊入營、即日歸郷。

定例集會 十一月十一日（金）於如水會館

出席者（會員）吉澤 村尾 久保田 手塚 吉澤松 増山 小

柳 林 新羅 望月（部員）森川 佐々木 岩崎 原 船本

大塚 日江井 山田

一年振りにて歸京された林俊介君を迎へる。

入營會員送別會 十二月三日（土）於如水會館

出席者（會員）中川 吉澤 村尾 増山 林 松浦 新羅 小

林 望月（部員）森川 佐々木 岩崎 原 船本 大塚 日江

井 里見 宮城 高橋 木島 小泉 山田 桧淵 森下

十二月十日入營する小林、望月兩君を圍んで夕食を共にし、後
いつもの部屋に集つて中川さんの激勵の辭を贈る。但し別記の
通り兩君共即日歸郷となり、又一月十日に入營した小谷部君も
同じ結果になつて了つた。

編輯後記

謙坊と同じ聯隊に入りましたものゝ、三日目に歸されて了ひま
したので、又元通り編輯をやることになりました。この四月迄
は責任がありますので續けてやります。一月號は小生の怠慢か
ら非常におくれて甚だ申譯ありませんが、二月號は近い中に御
送り出來ませう。尙新らしいカットは渡邊九郎氏の御手を煩は
せました。山岳部の報告は次號にまとめます。冬のシーズン中
御出かけの方が中々多いと存じますが、會報を賑かにして下さ
いますよ、御願ひ致します。（望月記）